

『源氏物語』の研究—物語空間へのアプローチ—

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D143666

氏 名 : 加藤 伸江

本研究は、『源氏物語』の舞台を想定・考察していくことで、『源氏物語』の読解を深め、作者や当時の読者が思い描いていた風景の形を具体化し、自然と人事が融合していた文化から生まれた『源氏物語』の物語空間を明らかにするのが目的である。『源氏物語』には、四季おりおりの自然が多く描かれている。自然景物に思いを託して歌が詠まれ物語が進行する。寝殿造の邸宅は開放的であり、自然の景物を模した邸宅が最も格式の高いものとされていた。宇治や須磨・明石など京以外の周辺地の邸宅は、川や海に面して建てられていたと設定されており、自然と切り離せない空間となっている。

第一編では、源氏が造営した六条院の姿を探求する研究を行う。現代の生活様式が変化し、『源氏物語』に描かれている建築の構造が理解しがたくなっている。現代の小説が映像化されることはよくあり、これは我々現代人がその小説に登場する場所（国会議事堂や駅、百貨店、銀行など）に対し、共通のイメージを持っているからである。では、『源氏物語』が書かれた頃の最高位に就いた人が造営した邸宅はどのようなものであったか、当時の読者たちには共通認識があったに違いない。源氏が造営した六条院が四町（一町が120メートル四方）と明記してあるからには、その空間意識を読みとらねばならないだろう。宮仕えをしていた女房たちは、実際仕えている宮中や邸宅から、その空間を共通認識として持っていたはずである。

従来、平安時代の寝殿造邸宅は、左右対称であると言われてきたが、川本重雄氏<sup>(1)</sup>の研究によって、左右非対称であることが明らかとなった。『源氏物語』研究において、六条院想定図が数多く作成されている<sup>(2)</sup>が、左右対称と言われていた従来説が反映されたものであり、最新の建築分野の学説である左右非対称説が反映されていない。左右非対称の寝殿造の姿を『源氏物語』の六条院にも反映させる必要がある。

第一章「町ごとの役割についての考察—儀式における六条院の入口—」では、まず、六条院で催される儀式について町ごとに区別し、入口に注目して概観した。秋の町を会場にした「中宮の御読経」、「明石姫君の裳着」の場合、春の町と連携して行われ、大路に面した春の町が入口とされていた。六条院の晴は、大路に面した春の町と夏の町であり、当時の貴族邸宅の構造を反映したものとなっている。町ごとの特色を読み取る必要がある。

第二章「六条院行幸場面の再検討—馬場殿の規模と廊の改築についての考察—」では、馬場殿に加えて馬場・厩についても考察し、中の廊の壁を崩した源氏の演出について検討した。六条院の馬場殿を、宮中の武徳殿を模した形に想定した案を提示した。さらに、秋の町の紅葉を見せるために、廊の壁を取り払う演出をしたと考えた。

第三章「六条院夏の町西の対の妻戸の間と隅の間について—玉鬘を垣間見た場面の記述から—」では、蛍兵部卿宮と夕霧が、玉鬘を垣間見たのはどこかを検討した。野分の見舞いで訪れた夕霧は六条院の身内であり、蛍兵部卿宮は客人である。妻戸の間と隅の間は、間としての機能が異なり同一に扱われる空間ではないことが分かった。空間の使い分けがなされていると考えられる。

第四章「蜻蛉巻における女一の宮を垣間見た場面の検討—馬道の方からの薫の視線につ

いて一」では、蜻蛉卷の女一の宮を薫が垣間見る場面を検討した。亡き光源氏と紫の上の追善法華八講の後片付けが行われている間、女一の宮は春の町の西の渡殿に居た。釣殿の方からやって来た薫は、そこで女一の宮を垣間見ることができたのである。釣殿からどういう経路で近づき、どのような視線で女一の宮を垣間見たのか。「国宝 石上神宮摂社出雲建雄神社拝殿」を参考に馬道の構造について検討した。

第五章「若宮誕生後六日目の移動について一産養の儀から見る冬の町一」では、若宮誕生後六日目に冬の町から春の町へ移動した理由を考察した。三夜・五夜は冬の町で行われたが、七夜を前に春の町に戻るのである。産養七夜は内裏が主催する重要な儀式である。冬の町は、ほかの殿舎に劣らない設備にしたのだと語られている。しかし、若宮誕生の産養の儀の会場の移動によって、冬の町は春の町に比べ劣っていることが示されることになる。これには、春の町と冬の町の決定的な殿舎の格式の違いが表されていると考えられる。

第六章「町・間」の読み方の考察一「四町（よまち）を占めて」を発端に一」では、六条院の「四町を占めて」を発端に、「町」という語の示す意味と読み方について考察した。加えて、「間」という語についても考察した。貴族の日記などの記録は、主に漢字で書かれている。一方で、平安時代の物語は主に仮名で書かれているため読み方が分かる。『源氏物語』の伝本の表記は、「よまち」と仮名で書かれており、「よんちょう」とは表記されていなかった。「間」に関しては、『源氏物語』では「ま」と読んでいることを確認した。足利義政の東山殿「嵯峨の間（九間）」など、室町時代の住宅について川上貢氏の研究があるが、「間」の空間は室町時代に現れたものではなく、平安時代から存在していたと言える。

第七章「河原院の池とはどういうものか一六条院の池への影響」では、源融の河原院の池について考察した。河原院には、塩竈の景観を模し、海水を運んで塩焼きを楽しんだ池があったと紹介されている。一方、六条院の池では、塩竈ではなく、異国を想起させる姿を描いている。河原院のあった場所や規模、一世源氏の造営など、六条院の準拠であることは『河海抄』が記すとおりであろう。しかし、池について具体的に見ると、塩竈の浦を模したことや潮水を湛えていること、毎日三十石の潮水を運んだことなど、今日伝えられている河原院の池の姿が六条院の池には反映されていないのである。これは、河原院の伝承が変遷していることによるものであり、紫式部の抱いていた河原院像が今日の伝承とかけ離れていることが原因である。当時の認識に近づく考証が必要であることを再認識した。

第二編では、都を離れた周辺地に描かれる空間の考察を行った。『源氏物語』には、須磨や明石から眺める海が描かれ、宇治では宇治川が舞台となる。宇治川の描写は、実地に即した正確な描写がなされていることを検証する。

第一章「茅屋は源氏の造営か一須磨の住居想定図私案一」では、源氏の不遇時の滞在場所として須磨と明石が並び称せられることが多いが、全く違う景であることを明らかにした。須磨の住居は茅屋であった。廊か屋か判別のつかない建物も在り、源氏の見馴れない空間となっていたことが分かる。須磨の住居を源氏の造営だとする説があるが、『一葉抄』『弄花抄』などに注記されるように、茅屋はもとからその場にあったと考えられる。須磨

の住居は、源氏の指図造営ではないと考える。

第二章「宇治八の宮邸の考察―「水にのぞきたる廊」を中心に―」では、宇治八の宮邸のうち、「水にのぞきたる廊」を中心に考察した。廊を川の間近まで設置するのは治水上難しいという池浩三氏の論がある。が、水に面した建築物に、巖島神社摂社客神社祓殿や琵琶湖の浮御堂がある。さらに、現在でも河川工法に使用される楊が描かれており、写実的な空間を創出していると考えられる。

第三章「浮舟巻「橘の小島」の位置について―宇治川の水面の描写から―」では、「橘の小島」は穏やかな水面に位置することが分かった。少し舟を停めて匂宮と浮舟が鑑賞する「橘の小島」は、穏やかな流れに位置しており、急流の中にはない。浮舟の邸から眺める宇治川と、「橘の小島」付近の宇治川は同様ではない。現在目にする姿とは違い、宇治川はかつて巨椋池に注ぎ、幾多の島洲を作り、湖とも川とも言えない複雑な地形を形成していた。このような川の様相を正確に描写しているものと思われる。流れが速く荒々しい川、舟遊びをしながら優雅に行き交う穏やかな川、二つの特徴を持つ川であったことを描き分けているのである。

近年、気候変動が形となって現れ、防災意識が高まっている。河川護岸や海岸堤防、砂防ダムなどの施設が整備されているが、構造物の建設で以て自然の変化に対応し尽くせるだろうか。物語や和歌の世界から、自然をよく見、体感している先人たちの姿が伝わる。自然への畏敬の念が描かれた日本文学を再読解することが、現代における環境変化への対策の一助にならないだろうかと思い、日本文学の最高傑作である『源氏物語』の物語空間を具体化する研究を行う。本論で取り扱った事項を反映させた、六条院想定配置図私案を作成して示し、作者紫式部が描こうとした物語空間へのアプローチを行う。

#### 注

- (1) 川本重雄氏『寝殿造の空間と儀式』（中央公論美術出版、2005年）。
- (2) 六条院についての先行論をまとめたものに、浅尾広良氏「『源氏物語』の邸宅と六条院復元の論争点」（倉田実氏編『王朝文学と建築・庭園（平安文学と隣接諸学一）』2007年、竹林舎）がある。